

第 15 章 結婚騒動 I : 1957 年～1959 年 (20～22 歳)

フランス軍隊長の通訳に任命される

駐留軍の隊長はアウレフ郡の郡長も兼任していたが、私が行政事務にも素質がありそうだったと思っただけで、農業局の仕事と並行して郡役所の仕事もするよう命令してきた。そういう訳で私は郡役所で統計事務と通訳の仕事をするようになった。カイドたち（訳注：元はイスラムの法官。この当時は地元社会での事実上の村長のような存在。）から行政府へ来る書簡はアラビア語で書かれているので、隊長に渡す前にフランス語に翻訳し、逆に隊長からカイドへの書簡はアラビア語に翻訳した。これらの仕事の他、私はアウレフの青年会議所の会頭にも選出された。地元では色々なアマチュア・スポーツが行われていたが、サッカーは特に盛んだった。私も、コロン・ベシヤールの白衣修道会の職業訓練所では、サッカー・チームに入っていた。小さいころからやっていた訳ではないので、そう上手ではなかったが、サッカーが好きなことにはかけては人後に落ちず、一人でも多く人たちにこの楽しさを分かってもらおうと、地元の青少年たちにアウレフのチームへの参加を薦めて回った。私たちのチームの練習試合の相手は、インサラーやアドラールの青年会議所のチームなどだったが、地元のフランス軍のチームとも時々対戦した。ある時の軍のチームとの試合で、元プロ選手のアブデラフマン・ファレス (Abderrahmane Fares) さんが審判をしてくれたことがあった。彼こそ後のアルジェリア暫定政府の大統領となった人物であるが、当時はインサラーの屋敷で監視下に置かれていた。（訳注：暫定政府＝エビアン独立協定後、国民投票までの間の移行期間を管理するために設置された行政機構。）この時の試合結果は、3 対 1 で相手チームの勝ちだった。

当時私は若く使命感に燃えていたので、それ以前から考えていたある試みに、いよいよ着手する決心をした。カイドや軍当局などの権力者と、貧しい農家などの弱者との間の仲介役を務めようと思ったのである。私は常々、当時の社会で当たり前だった、黒人奴隷の子孫（＝ハラティン）の住民と、彼らの元の主人であるアラブ系やベルベル系の住民との間に根を下ろした差別の習慣に、不条理さを感じていた。私は農業指導員として方々の小規模農家を訪ねて回り、彼らが色々な要望を持っていることを知った。私は農家の人たちに、農業器具、肥料、殺虫剤などについて行政当局から援助を得るには、どのように要請書を作成すればいいかを指導した。また、農業局から何か通達が回ってくると、農家にどう伝えたら効果的かを考えた。こうして活動するうちに、農家が私に寄せる信頼は不動のものとなって行き、担当地域で私の顔を知らないものはないほどとなった。なお、ティディケルト地方の各地の農業指導員は、定期的にインサラーの上司に報告書を提出し、またウアルグラの本部にもそのコピーを送る決まりになっていた。これは指導員たちが怠けるのを防いだだけでなく、農業という主要産業の中で自分たちがいかに重要な責任を負っているかを自覚するのにも役立った。

役所の上司である隊長は、カイドのところで地元の有力者たちに、役所からの通達や規制を説明する会合を行う際には、通訳させるため私を連れて行った。そのため、私はアラ

ビア語文法を磨く必要を感じ、再びシェイク・ベイの教室へ通うことにした。これは 1957～58 年の頃のことである。しかし、昼間は役所と農業局の仕事で忙しかったので、学校へ行けるのは夜だけで、一回の授業も半時間ほどだった。ここでは、アラビア語文法だけでなく、イスラムの礼拝・税・断食・巡礼等に関する講義も受け、またコーランの節の解釈についても学んだ。



イメージ画像：近年のアウレフ郡役所の郡長執務室。後列右端が当時の郡長。右から三人目が小堀教授。後列左から二人目がハジ氏。他は役所職員の皆さん。(2002 年記者撮影)

未来の妻メサウダのこと

郷里のアウレフの役所に配属になることが出来て私は幸せだった。メサウダとも頻繁に会うことが出来た。彼女との付き合いは既に 3 年目に入っていた。私たちの結びつきは健全で誠実なものだったが、もはや彼女は私にはなくてはならない存在となっていた。メサウダは一家の末っ子として 1938 年に生まれたが、彼女の母は 1946 年ごろ亡くなり、その 2 年後には父も亡くなった。彼女の上には、上から順番に兄のハマ (Hama)、姉のメリアム (Mériam)、アギーダ (Aguida)、ジェーマ (Djemâa)、メバルカ (Mebarka)、ファトマ (Fatma) がいた。一家の父親はアリ・ベン・ルクダール (Ali Ben Lkhdar) といい、タイバト (Taybat) 出身の退役軍人で、第一次世界大戦でフランス軍に従軍、モロッコでの戦闘にも参加し、軍と共にアルジェリア南部へ移って来た。このメハリスト (訳注：サハラで仏軍が組織したラクダ部隊メハリの現地人兵士) だった父は、ティミムーン出身の母、アイシャ・ベント・ブーベケール (Aïcha Bent Boubekeur) と結婚し、これら七人の子供をもうけた。この話の当時メサウダは、兄のハマ、それに離婚して実家に戻っていた姉のメバルカと共に暮らしていたが、一家は両親から相続した二つの農園から採れる作物によって生計を立てていた。

その他の姉たちのうち、長女のメリアムはベシヤールの軍人と結婚し、むこうに家を構

えて、女の子二人男の子四人の計六人の子供をもうけた。次女のアギーダはアイン・セフラの軍人と結婚し、一人子供を生んだが死産だった。その後この夫とは離婚し、ベシャールのある人物と再婚したが、再婚相手とは子供に恵まれなかった。三女のジェーマはメハリストと結婚し、女の子三人と男の子一人を生んだが、娘のうち一人は幼いうちに亡くなった。ジェーマの一家は、はじめ父の出身地タイバトに居たが後にトゥグルトへ移った。四女のメバルカは退役軍人と結婚し、男の子を一人生んだが死産で、その後離婚した。五女のファトマも退役軍人と結婚し、男女二人ずつの子をもうけた。ファトマの夫のベンガルラ (Bengaloula) は飛行機の事故で亡くなった。彼は、アウレフの空港から飛行機に乗り、トゥアレグ族と商売をしにサハラ南部のキダル (Kidal) へ行く途中その惨禍に会った。これはティディケルト地方では、1930 年に一人のイギリス人が操縦する小型飛行機がレガソンの南で消息を絶って以来、二度目の飛行機事故である。そのイギリス人の機体は 1960 年になって発見され、その翼の下からイギリス人の遺体も見つかった。なお、ファトマの子供たちのうち長男も、その父の事故後間もなく亡くなっている。長男で唯一の男子のハマは 4 度結婚した。最初の妻はベシャール出身、二番目はアウレフ・シュルファ (Aoulef Cheurfaa) 出身、三番目はアウレフ中央 (Aulef Centre) 出身、四番目はフォガレット・エズ・ズーア (Foggaret Ez-Zoua) 出身だった。しかし、どの妻とも子供は一人もできなかった。ハマは、長年タマンラセットで保健局や地方開発局の運転手として働き、そこで定年を迎えた。

メサウダの気持ちを確かめる

メサウダの一家との親交は益々密になり、私はまるで家族の一員になったかのようにだった。私はメサウダと接する時いつも真面目で謙虚な態度を忘れなかったので、一家は私に全幅の信頼を寄せてくれ、誰一人として、いつの間にかこの黒人の息子が、一家の娘の心を射止めていようとは夢にも思わなかったにちがいない。1958 年のこと、農業局がエル・ウェッド (El-Oued) の近くのホバ (Hobba) に何千本というナツメヤシを植林する巨大事業を実施することになり、私もこの計画に加わるためアウレフを三か月間留守にすることになった。ホバのユダヤ人宝石商の店で、私は二本の金の腕輪を見つけ、思い切ってそれを買った。将来の妻への贈り物にしようと思ったのだ。数カ月ぶりにアウレフに戻った時、私は急いでメサウダに会いに行き、その二本の腕輪を渡した。そして彼女に、このことはくれぐれも秘密にしておくように念を押した。もしばれたら、メサウダの兄さんたちは二度と私をこの家に入れないだろうと思ったからだ。私たちの関係はますます深まって行ったが、この頃の私にはまだ、アラブ人の女と黒人の男の間に立ちふさがる障害に、本気で立ち向かう決心はついていなかった。

ある日、メサウダの家の中で、私と彼女ふたりきりになったことがあった。その時彼女は私に切り出した。

「今日は私の気持ちを思い切って打ち明けようと思うの。あなたが私の本当の友達なら、私の今置かれている苦しい状況が分かるでしょう。あなたに私を救うことができるかし

ら？」

私は、彼女に対していつも誠実であったつもりだし、これからも彼女を幸せにするためならどんなこともする覚悟がある、と言った。

「それよ。そのセリフをあなたの口から聞いたかったのよ。」と彼女は喜んだ。そしてこうも付け加えた。

「よく聞いて。私は重い鬱病に罹っているけど、そのきっかけというのは、ある北部出身の年寄りから結婚を申し込まれたからなの。私はその気がないから、その申し込みを断ったの。そしたら、知り合いのおばあさんがやってきて、もう二十歳を過ぎているのにいつまでも家にいるわけにいかないでしょとか言って、私を説得しようとしたのよ。それで鬱病が酷くなって、気が狂ったみたいになって、その噂は村中に広まって、今では皆が知っているわ。これはひどく私の評判を傷つけたから、もうアラブ人の若者の中に私と結婚しようとする者なんていない。私はあなたのことを心から愛しているけど、あなたは私を救ってくれる？私と結婚してくれる？」

私は一瞬も迷わなかった。もちろんだと答えた。しかし、私と結婚して、彼女の不名誉と聞かないかと聞いた。彼女は泣いて私の首に抱き付き答えた。

「何も問題ないわ。私にとって一番大事なのは、あなたの妻になることよ。他人が言うような不名誉だとかは気にしないわ。世の中の決まりをひっくり返すことになるから、世間は騒ぐでしょうけど、それに耐える覚悟はあるもの。うちの両親はもういないし、私のことは私が決めればいいのよ。うちの兄や姉だって、いつかは気付くと思うわ。神の前に万人は平等だって。」

ちなみに、婚礼の儀式において読み上げられるコーランの節には、「全ての人間はアダムとイブである。一方が他方に優越することはない。」という一文がある。



その後のメサウダ夫人（中央の座った婦人）。青いドレスの女性は娘。子供二人は孫。（2002 年記者撮影）

結婚のため加勢を頼む

私たちは、時期が熟すまで、これからもしばらくは、純粋な友達として慎み深く振舞おうと申し合わせた。その間に、私はシェイク・ベイに会いに行き、私たちのことを打ち明けた。シェイクは言った。

「私は、自分の教え子には、清純な娘と結婚して欲しいと思っている。まず自分の目でその娘を見てみたいから、彼女と会えるよう手配しなさい。」

私は承知し、シェイクは翌日私の家でメサウダと対面することになった。賽は投げられた。メサウダが後で語ったところによると、シェイク・ベイは彼女に、「お前たち二人の関係は清いものか？」と聞いたそうだ。彼女が「もちろんです！」と答えると、シェイクは「よろしい！聞きたいのはそれだけだ。お前はもう帰ってよろしい。」と言って、あっけなく面談は終わったという。

私は、メサウダに結婚を申し込んだことを、友達の一人に頼んで私の父に伝えてもらった。というのは自分の口で言うのが照れ臭かったからだ。その後、カイド、イマーム、私の父、コーラン学校時代の恩師の四人の間で数日間に渡る大協議が行われた。カイドはイマームに聞いた。

「これが我が家の娘のことだったら、とんでもないと言うところだが、法の下で、また神の前において、ことは同様に断じられるだろうか？」

「当然ことは同じには扱えない。」とイマームは答えた。

カイドであるシッド・アーメッド・エル・ベクリ（訳注：第 2 章で既出。フランス統治時代最後のカイド。）は続けた。

「もし我々がこの婚姻を認めなかったら、娘はフランス軍の隊長のところへ駆け込むだろう。はじは彼の通訳だ。我々はどうなる？ここは一つ可及的速やかに解決策を見つけなければ。」

そこで、これらの名士たちは一計を案じた。カイドとイマームは私の父に、口実はなんでもよいから何人かを招いて夕食会を開き、メサウダの兄のハマも呼びなさいと命じた。

1959 年 10 月 9 日 21 時、全ては手はず通り準備され、アイーシャ叔母の家で夕食会が始まった。まずカイドが話を切り出した。

「神が人間を創り給うた。神の前に万人は平等である。ハマ、お前の考えを聞くために我々は今宵集まった。はじがお前の妹メサウダとの結婚を望んでいる。これをお前はどう思う？」このように賢人に、用意周到な言い回しで切り出され、ハマに逃げ道はなかった。彼はすぐに答えた。

「私には何も言うことはありません。この婚姻が誰かに強制されたものでなく、この第一の当事者である妹がいいと言っているのなら、私も受け入れましょう。」

このハマの返事に対して、イマームはこう言った。

「思った通りの答えだ。お前のような敬虔なムスリムならきっとそう言うと思っていた。お前の判断は正しく、人生の良い選択は、お前の妹を平安へと導くだろう。そして、この功績により神はお前に恩恵を賜るだろう。」

次にイマームは、会席者の中から、花嫁に会いに行く者を二名選んだ。シャリーア（訳注：イスラム法）の婚姻に関する定めに従い、新郎と新婦はそれぞれの代理人を指名しなければならないので、イマームに指名された使者は、新婦に誰を指名するかを聞きに行くのである。私がメサウダは私の両親の家に居ると伝えると、使者たちは出かけて行った。その日私とメサウダは事前に打ち合わせて、彼女は夜になったら私の家に行っておくように決め、母にもそう知らせてあった。使者たちは戻って来て告げた。

「花嫁は彼女の兄を代理人に指名しました。」

「素晴らしい。ハマ、今やお前は名誉を一身に受けている。」と言い、次に私に向き直って訊いた。

「さあ、次はお前だ。新郎は誰を代理人とする？」

私は、私の父を指名すると答えた。選ばれたそれぞれの代理人は、婚礼の最終的な責任者を一人選ぶ。父はコーラン学校のタレブに頼んだ。

「先生、私は代理人の名誉をあなたに譲ります。」

「私も先生にお任せします。」とメサウダの兄も言った。

「よろしい、完璧だ。」とイマームが言い、コーランとハディース（訳注：預言者モハンマドや後継者の言行録）の中の婚姻に関連する節を朗読した。これにより私たちの婚姻は正式に承認された。次にイマームは、隣の家を集まってこの会合の成り行きを待っている女たちの所へも、結果を知らせに行くよう命じた。ほんの少しの間があつて、耳をつんざく「ユーユー」という歓声が辺りに響き渡った。一方、男たちは共同礼拝を行い、神がこの婚礼に祝福を賜るようにと祈った。新しい夫婦が末永く共に暮らし沢山の子供に恵まれ、

さらには、その子供たちが両親と社会に貢献する人物になるようにと。その後、夕食とお茶が供され、それが終わると、会席者は一人ひとり、まず私と握手して祝辞を述べ、次に私の父、その次に将来の私の義兄に挨拶して帰って行った。

一騒動持ち上がる

夜の 10 時ごろ、メサウダの兄のハマは自分の家へ戻り、事の次第を妹のメバルカに告げた。このニュースに家は雷が落ちたような騒ぎになった。罵りと呪詛の声が近所中に響き渡った。メバルカ姉さんは、彼女の姪のエル・アリア (El-Alia) を連れて、私の家を急襲した。私が新居にと用意していた家はその時まだ無人だったのだが、メバルカは中にメサウダが居ると思いついて、家の戸に大きな石を投げつけた。幸いメサウダはその夜は私の両親の家に行っていたので、事無きを得た。メバルカの呪い罵る声は深夜まで続いたが、近所の人たちも怯えて、出て行ってみようとはしなかったようだ。翌朝 10 時ごろ、メバルカ姉さんは今度は、フランス駐留軍の隊長の所へ抗議に行った。門番はもちろんのこと、居合わせた大勢の人が駆け付け、彼女を説得しようとした。あなたの妹は間違ったことはしていない、もし、この人種差別を擁護するような言動が隊長が耳に入ったら、あなたの方が罰せられると。メバルカ姉さんは、ようやく攻撃を諦めた。しかし、私たちが誹謗中傷する噂が立ち始めたので、私たちは婚礼の日時を延期し、世間が落ち着くのを待つことにした。